

展示資料2 江戸ヨリ木曾街道新宮城ニ至ル地図 スポット解説

野ヅリ駅 ミトノエニリ半

野尻宿(現長野県木曾郡大桑村)は、中山道40番めの宿場で、戦国期にはすでに宿場として機能していたとされ、木曾11宿のなかで、奈良井宿について二番めに長い、660mに及ぶ町並みをもつ。町並みの向こうに描かれているのは木曾川で、このあたりの中山道は、西側下方に木曾川を見下ろしながらすすんでいく。貝原益軒(1630-1714)の紀行文『木曾路之記』には「木曾の山中は。深山幽谷にて。山のそはづたひに行がけ路多し。殊更野尻と見との(=三留野)之間。尤あやうき路なり。此間左は山也。其山のかたはらのわづかなる石おほき道を行。右は数十間高きがけにて。屏風を立たる如なる所もおほく。其下は木曾川の深き水也」とある。

三留野駅 ツマゴエーリ半

三留野宿[みどの](現長野県木曾郡南木曾町)は、中山道41番めの宿場である。三留野宿を出て中山道を妻籠宿に向かって南下していくと、道は木曾川と別れ、峻険な峰を登っていくことになる。その分かれ道を見張る高台に位置するのが妻籠城であった。

木曾義仲ノ出城跡アリ

妻籠城址(現長野県木曾郡南木曾町吾妻)として妻籠宿の北に残されている。木曾義仲(1154-1184)時代に遡るものでは到底ないが、戦国期にその後裔を名乗る木曾義昌(?-1595)の支配下にあったことから、そう称されたものと考えられる。木曾家は、天正18(1590)年に、下総国阿知土(網戸)に移封された。現在の千葉県旭市に含まれる一帯である。旭市(旭町)の名は、「旭將軍」と呼ばれた木曾義仲とのゆかりからつけられたものである。

妻籠駅 マゴメエーリ

妻籠宿[つまご](現長野県木曾郡南木曾町)は、中山道42番めの宿場。昭和51(1976)年に日本で最初の「重要伝統的建造物群保存地区」(いわゆる「重伝建」)に選定された7カ所*のうちのひとつである。江戸時代の町並みを残し(復元し)、人気の観光地となっている。

*1976年9月4選定の「重伝建」は、秋田県仙北市角館、長野県木曾郡南木曾町妻籠宿、岐阜県大野郡白川村荻町、京都府京都市産寧坂、同府同市祇園新橋、山口県萩市堀内地区、同県同市平安古地区。

麻古女峠

妻籠宿を出た先には、急峻なつづら折れの山道が描かれている。登りつめたところが馬籠峠(標高800m)で、現在は長野県と岐阜県の県境になっている。ここはかつては長野県木曾郡山口村だったが、この村が平成17(2005)年に岐阜県中津川市に越県合併したため、このような状態になった。

マゴメ駅 落合エーリ五丁

馬籠宿(現岐阜県中津川市)は中山道43番めの宿場で、木曾11宿最後の宿場となる。島崎藤村(1872-1943)の生家は、この宿場の本陣・問屋・庄屋を兼ね務める旧家であり、小説『夜明け前』は、この地を舞台に、自身の父親をモデルとする主人公の半生を描くものである。藤村が「美濃方面から十曲峠に添うて、曲がりくねった山坂をよじ登って来るものは、高い峠の上の位置にこの宿を見つける。街道の両側には

一段ずつ石垣を築いてその上に民家を建てたようなところで、風雪をしのぐための石を載せた板屋根がその左右に並んでいる」と描写した。急傾斜地にひろがる宿場町の景観は全国的にもめずらしく、妻籠宿とともに観光地として成功している。妻籠と馬籠という、現在では県境を挟むふたつの地域を「中山道」をキーワードとして一体化し、「点から線へ」と近代観光のあり方を変えた初期事例として注目されている。

十石峠

十曲峠〔じゅっきょくとうげ〕(現岐阜県中津川市馬籠新茶屋)は標高 500mの峠。江戸時代中頃までは立場茶屋があった。落合宿への下りには、「中山道落合の石畳」と呼ばれる石畳が(復元箇所も含め)840mほど残っており、かつての中山道を雰囲気味わうことができる。

「シナノ ミノ サカヒ」の角柱あり

かつては、十曲峠が信濃国と美濃国との国境だった。峠の東、信濃国側にあたる長野県木曾郡山口村が、平成 17(2005)年に岐阜県中津川市に岐阜県合併したため、現在の長野県と岐阜県の県境は東にずれ、馬籠峠にかわっている。

「芭蕉 送られつ 送りつ 戻る木曾の穂」の句碑あり

十曲峠にある松尾芭蕉(1644-1694)の句碑で、天保 13(1842)年に建立されたものである。碑には「送られつ送りつ果は木曾の穂 天保十三壬寅年水無月建之 裏梅園古狂」と刻まれている。建碑した「裏梅園古狂」とは美濃派の俳人・大脇信親のことで、馬籠宿大黒屋の主人であった。芭蕉が中山道を旅したのは貞享 5(1688)年のことで、『更科紀行』刊本(河合乙州編)には「送られつ別ツ果は木曾の秋」とあり、句碑とは中句が違っている。芭蕉の自筆草稿には「おくりつ」とあるといい、芭蕉の句は推敲を重ねるうちに変わっていったため、定稿とされる形以外のバリエーションを持った句が複数伝わっていることもあるようだ。本資料には「送られつ送りつ戻る木曾の穂」と、さらに違うバージョンが記載されている。また、本資料では句の最後の「穂」の文字が非常に読みにくく書かれている。島崎藤村の『夜明け前』には、この碑(翁塚)の建立時の様子が描写されており、この字をめぐる以下のようなやりとりを見ることができる。「これは達者に書いてある。」「でも、この秋という字がわたしはすこし気に入らん。禾へんがくずして書いてあって、それにつくりが龜でしょう。」「こういう書き方もありますサ。」「どうもこれでは木曾の蠅としか読めない。」本資料が、読みにくい「穂」の字を律義に再現したと考えると面白い。

連理の松

馬籠～落合付近にはふたつの「連理の松」伝承が伝わっている。ひとつめは「中の茅」にあった松に関するもので、宝暦 6(1756)年に尾張藩士が書き残した「覚書帳」には、「連理之松」が「中のかやと申所」に生えていたが、30 年ほど前に枯れたという記述がある。その松に関する詳しい物語が、明治初期につくられた小冊子「連理松之傳記」(「酉年四月 信州木曾馬籠宿 中の茅版」)に記載されている。そこには、大永 7(1527)年の出来事として、村に住む鈴木某の夢枕にたった神が、鈴木の家を末永く守ること、については村はずれの祠の横に生える木を切らないようにお告げをしたという。その木は雌雄2本の幹が絡み合った連理の松になったが、先年の嵐のために枯れ、いまは古株を残すのみだというもの。もうひとつの伝承は、口承伝承として伝わる「荒町横手」の松に関するもので、周防国岩国藩の指南役同士の諍いから闇討ちにあい殺された国次惣左衛門の妻が子ども二人を連れて敵討ちの旅に出るが荒町(現中津川市馬籠荒町)のはずれで返り討ちにあってしまう。残された子どもたちが母の遭難の地に仮墓(妙譽定享信女 貞享三年十月二

十三日) [貞享三年=1686年]を建てると、そこから7本の松が生えてきた。村人は夫婦の物語を語り継ぎ、その松を連理の松と呼んだというもの。これも現在では「跡」しかないという。(『山口村誌 下巻(近・現代・民俗)』山口村誌編纂委員会、平成7年、825-828頁。)なお、本資料で通過する中山道沿いではなく、三留野宿から妻籠宿へ向かう途中で、中山道に入らずそのまま木曾川にそって西へ下り坂下村から山中に入った現中津川市下野という地区には、昭和6(1931)年に国の天然記念物に指定されたほどの連理の巨木「下野の女夫マツ」[しものめおとまつ]が1980年代に枯死するまで存在していた。本資料に描かれた「連理の松」には、切り株ではなく本の松らしきものが描かれているから、あるいは、距離は遠いが当時も生えていた、この「下野の女夫マツ」を示しているのかもしれない。

十石バシ

現岐阜県中津川市落合の落合川(木曾川の支流)に架かる橋で、現在の名称は「下桁橋」。史料により、落合川板橋、落合橋、釜ヶ橋、刳橋、大橋など、地名や形状からさまざまに記されている。当初は木造で橋脚のない刳橋構造であったが、落合川は水流が激しくしばしば増水したため、橋は頻りに流失したといい、橋普請の負担に耐えかねた落合村の願出より、寛保元(1741)年から十曲峠とこの橋を渡らない新ルートが利用されるようになった。しかし、以前よりも長距離となり、実際に往来するひとびとの評判はよくなかったことから、明和8(1771)年には、十曲峠からのつづら折れの急坂を改修し、緩やかに落合川岸まで下るルートがつくられ、川には新たに橋脚つきの橋が架けられている。歌川広重(初代:1797-1858)の「木曾海道六拾九次之内落合」では、落合宿を出て、この橋を渡ろうとしている大名行列が描かれているが、本資料同様、橋に橋脚がみられる。

落合駅 中ツ川へーり五丁

落合宿(現岐阜県中津川市落合)は中山道44番めの宿場。峻険な山路続きの木曾路が終わり、ここからしばらくのあいだ、中山道はやや平坦な平野道となる。

落合五郎ガ旧跡アリ

現岐阜県中津川市落合にある、木曾義仲(1154-1184)の家臣、落合五郎兼行の館(城)跡。地元では「おがらん様」と呼ばれている社があり、落合五郎が祀られているという。落合五郎を木曾義仲の養父である中原兼遠の子とする伝承もあり、だとすれば、義仲の愛妾・巴御前とは兄妹ということになる。

中津川駅 大井エニリ半

中津川宿(現岐阜県中津川市)は中山道45番めの宿場。濃尾平野の東、木曾川沿いに位置する中津川は、古代より交通の要衝であり、東の木曾、北の飛騨、南の伊那やその先の三河からの物資の集積地として栄えてきた。中津川宿を過ぎた先に描かれた川は川上川で、現在は中津川と呼ばれている。中山道が川上川を越えるところには「中津川大橋」が架かっていたが、寛政元(1789)年、寛政五(1793)年、文化五(1808)年、嘉永六(1853)年と、たびたび流失している。本資料に橋が描かれていないのは、そのためか。

オオモリノハマン(鳥居の絵あり)

「坂本神社八幡宮」(現岐阜県中津川市千旦林)。延喜式内社の坂本神社に比定される二社のうちのひとつ。坂本神社は中山道を行き交う旅人が道中の無事を祈願したと云われる古社であり、明治初年

に、千旦林の八幡神社と茄子川の諏訪神社(現中津川市茄子川)が正邪を争うが決着せず、それぞれ「坂本神社八幡宮」「坂本神社諏訪社」と名乗り、現在に至っている。

ナスビ川 (橋の絵あり)

茄子川村[なすびがわむら]は現岐阜県中津川市茄子川。中津川宿と大井宿の間宿で、皇女和宮(1846-1877)が江戸降嫁の際に小休したという建物(茄子川御小休所篠原家)が現存している。川に架かる橋の絵は、茄子川村の入り口、坂本川に架かる坂本橋であろうか。

＊「間宿」[あいのしゅく]＝立場[たてば]が発展し、宿場のような機能を持ったものだが、正式な認可を受けた宿場を保護するため、幕府は間宿での宿泊を禁止していた。

大井駅 大久手エ三リ半

大井宿(現岐阜県恵那市)は中山道 46 番めの宿場。律令制下の「駅」である大井駅が置かれていたところもいい、古くからの交通の要衝であった。近世に入ってからも、中津川宿に次ぐ賑わいをみせていたという。大井宿を過ぎると、中山道はふたたび山中へ入っていく。御嵩宿の手前まで、しばらく山路が続く。

「西行ノ塔」の石碑

「伝西行塚」は現岐阜県恵那市長島町の山中にある五輪塔で、西行法師(?-1190)の墓と伝わる。西行は、俗名を佐藤義清といい、鳥羽上皇に仕えた北面の武士だったが、保延 6(1140)年に出家して以降は諸国を遍歴し、多くの和歌を残している。この「西行ノ塔」は、江戸時代のさまざまな紀行文に西行の墓として紹介されているものだが、五輪塔の形状等から、中世末～近世初期の供養塔と考えられている。なお、西行の入寂地とされる弘川寺(現大阪府南河内郡河南町)の裏山にも享保 17(1732)年に発見されたという西行の墓が存在している。

大久手駅 細クデエニリ

大湫宿[おおくて](現岐阜県瑞浪市大湫町)は中山道 47 番めの宿場。大井宿から大湫宿への旧中山道は尾根伝いに進んでいく山道で、現在「東海自然歩道」の一部となっている。近代に入るとほとんど使われなくなったため、往時の面影を色濃く残している。

枇杷峠

琵琶峠(現岐阜県瑞浪市)は標高 540mの峠で、全長 730mにおよぶ石畳や一里塚が残されている。かつては見晴らしもよく、江戸時代の旅日記などにもさまざまな書かれた名所であった。

細久デ駅 ミタケへ三リ

細久手宿(現岐阜県瑞浪市日吉町)は、慶長年間(1596-1615)に新設された、中山道 48 番めの宿場。広重の「木曾海道六十九次之内細久手」では、宿場の町並みを見下ろす松並木の急坂を行き交う旅人や人足が描かれている。

関ノ太郎云鬼ノ住シ岩屋アリ

現岐阜県瑞浪市から可児郡御嵩町にかけて「鬼岩公園」があり、木曾川の支流である可児川によって浸食された花崗岩の奇岩が連なっている。このあたりに住んでいた「関ノ太郎」という鬼が街道を行き交う旅人

や地元のひとびとに悪さをしていたのを、額縁(交告)盛康の命をうけた武士が討伐したという伝承が残る。「関ノ太郎」の首塚も、退治した側の額縁一族を祀る額縁神社も御嶽宿(現岐阜県可児郡御嵩町)のはずれにある。なお、額縁盛康は『平治物語』には源頼朝の天下掌握を予言する人物として登場しており、文治3(1187)年には可児川流域・中村郷(現岐阜県可児郡御嵩町)の地頭となっている。

「和泉式部」と書かれた石碑

現岐阜県可児郡御嵩町井尻にある、平安時代中期の女流歌人・和泉式部の墓と伝わる石碑。和泉式部が、旅の途中で病を得て、鬼岩温泉で療養したが甲斐無く、この地で没したとの伝承がある。石碑正面には「いつみ式部廟所」とあり、他の三面の文字は現在では摩耗によりほとんど判別できないが、古い記録を参照すると、右側面に「寛仁三己未天」、裏面に「専意法□」、左側面には「ひとりさへ渡ればしつむうきはしにあとなるひとはしはしとまれ」という和歌が刻まれていたという。しかし、和泉式部の旧跡は日本各地に(280カ所も)存在しており、墓とされるものだけでも30基、供養塔も含めれば65基におよぶという(西條静夫『和泉式部伝説とその古跡 下巻』近代文芸社、1999年、347頁)。柳田国男は、これを女人往生の寺、京の誓願寺と結びつけた熊野系の歌比丘尼の回国の成果と説明している。つまり、この碑は和泉式部の旅ではなく、遊行聖や熊野比丘尼たちの旅の痕跡を示すものなのである。

(注:寛仁3年=1019年)

ミタケ駅 伏見エーリ五丁

御嶽宿(現岐阜県可児郡御嵩町)は、蟹薬師と呼ばれる願興寺の門前町として栄えた、中山道49番めの宿場。願興寺は、戦国期の豪傑「笹の才蔵」こと可児吉長ゆかりの寺としても知られる。幼少期をこの寺で過ごしたのち、美濃斎藤家を皮切りに、織田家から豊臣秀次、佐々成政と主君を転々と替え、最後は福島正則に仕官し広島で死去した。戦国時代から江戸時代初期、才蔵のような、中部東海地域出身の武士たちの多くが、主君とともに日本各地に移動していった。なお、御嶽宿のあたりから景観がかわり、足下もそれまでの山道から平坦なものとなる。

フシミ駅 善師野へ四り

伏見宿(現岐阜県可児郡御嵩町)は、元禄7(1694)年に設置された、中山道50番めの宿場である。それ以前からあった土田宿[どた](現岐阜県可児市土田)が、木曾川流路の変化による渡し場移動で廃宿(木曾街道(上街道)の宿場としては機能)になったことにより、新たにつくられた。木曾川の渡しは、中山道の難所のひとつで、江戸中期に今渡[いまわたり]の渡し場(太田の渡し)が設置されて以降、昭和2(1927)年に太田橋が架橋されるまで渡し船が存在していた。ただし、明治35(1902)年からは、兩岸に組んだ櫓に渡した鉄製のワイヤーにつけた滑車で舟を牽引する方式となっており、それ以前の渡し船とは比ぶべくもない安全・便利・迅速・快適さであった。

「京 名古屋 追分」と書かれた石碑

本資料では、ここで中山道を離れ、名古屋方面の道へとすすむ。木曾街道、善師野街道、名古屋往還、上街道、本街道等と呼ばれる脇街道で、名古屋城の東大手門から、小牧宿、善師野宿、土田宿を通過して今渡で(初期は土田宿で)中山道と合流していた。

「右上方 左り左ヤ 道」と書かれた石碑

本資料では、木曾街道(上街道)を左の佐屋方面へ向かう。「上方」への道の先には、犬山城の天守が見えている。

尾^(州)町丹羽郡 犬山 成瀬隼人正三万石 サヤ街道ヨリ右エ見ユ

現愛知県犬山市。国宝指定された天守が現存する、犬山城がある。元和 3(1617)年尾張藩附家老の成瀬正成が城主となり、以降、明治維新を迎えるまで成瀬家9代の居城となった。初代正成以降、9代すべて官途は隼人正。

佐屋街道は、東海道の迂回路として利用された脇街道である。東海道の宮宿(現名古屋熱田区)と桑名宿(三重県桑名市)は、伊勢湾を船で渡る海路「七里の渡」で結ばれていたが、海が荒れることも多い難所で、これを敬遠するひとびとは、陸路の佐屋街道を利用していた。宮宿から陸路で佐屋宿へ行き、佐屋宿からは川舟で桑名宿へ渡る「三里の渡」ルート(→「左屋 勢州桑名迫川舟下り三里」の記述あり)で、「七里の渡」を使う正規ルートよりも2里ほど遠回りになる。

善師野村 コマキエ四里

善師野宿[ぜんじの](現愛知県犬山市)は、尾張藩が木曾方面の支配の利便性を高めるために開設した二つの道(上街道・下街道)のうちの、上街道の宿駅として置かれたものである。上街道(木曾街道)は主として武士が往来した道で、下街道は善光寺街道、内津街道とも呼ばれ、善光寺詣での旅人で賑わう、庶民の道であった。しかし、名古屋城下から(あるいは伊勢方面から)木曾路へ入るには、上街道より下街道のほうが短距離だったため、商人や旅人に加え、武士までもが下街道を利用することが次第に増えていった。そのため、尾張藩は寛政7(1795)年に藩士の下街道通行を禁止している。

*下街道=名古屋城下～勝川～坂下～内津～池田～高山～土岐～釜戸を経て、中山道の大井宿に至る。

コマキ村 キヨスエ二里

小牧宿(現愛知県小牧市)は、木曾街道(上街道)の宿場。永禄6(1563)年、濃尾平野のほぼ中心に位置する孤峰・小牧山に、美濃攻めを見据えた織田信長が小牧山城を築城し、その南麓に町が築かれた。信長は、永禄10(1567)年に美濃を陥落させると岐阜(旧井之口)へと居を移し、小牧山城は廃城となる。天正12(1584)年の小牧・長久手の戦いの際には、徳川家康がこの山に陣を敷いている。江戸時代になると、尾張藩による木曾街道整備にともない、小牧山南麓の町が東側に移転させられ、小牧宿となった。

此辺耕作道ナリ

清洲

現愛知県清須市。文明10(1478)年から守護所が置かれ、尾張国の中心となっている。弘治年間(1555-1558)からは織田信長が清洲城に居住し、永禄3(1560)年の桶狭間の戦いへの出陣も、ここからなされている。信長死後の織田家について議論したとされる、いわゆる清洲会議(天正10(1582)年)の舞台でもある。しかし、徳川家康の命により、清洲から名古屋への遷府が実施されることとなり、慶長15(1610)年、清洲は城下町ごと名古屋城下へと移転した。いわゆる「清洲越し」である。現在名古屋城内に「清須櫓」と呼ばれる櫓があり、清洲城の天守を移したものであるという伝承が残されている。

尾州愛知郡 名古屋ノ城 キヨスヨリ左エ見ユ

現愛知県名古屋市中区にある平城。大天守と思われる絵が描かれている。慶長 15(1610)年、徳川家康が九男である義直のために、西国諸大名に命じて築城を開始した、尾張徳川家の本城である。徳川家の威光を示す、大天守にあげられた「金鯨」(きんのしゃちほこ)で知られている。明治維新を迎えると、この金鯨は天守から下ろされ、東京湯島で開催された「博覧会」(明治5(1872)年)の目玉展示物となった。その後は、日本各地の博覧会や、ウィーン万国博覧会(明治6(1873)年)にも出品され、海を越えた旅をしている。明治12(1879)年、名古屋城に戻されたが、昭和20(1945)年5月の名古屋大空襲で焼失した。

此辺耕作道ナリ

カモリ村 合ヒノ宿

神守宿(現愛知県津島市)は、正保4(1647)年開設で、佐屋街道の宿場としては最も新しい。「合ヒノ宿」とあるが、神守宿には本陣も置かれており、「間の宿(合の宿)」ではない。同宿が北神守村と南神守村の二つの村によって運営されていたことを指すか。「徇行記」*に「宿内二本陣・問屋・茶屋其外商屋モ建ナラヒ、往還カセキヲ以テ生産トスル者多シ、然シ公卿侯伯ノ止宿休憩スクナキ駅亭故ニ利潤薄キ所ナリ」とある。

*「尾張徇行記」「尾州徇行記」とも。尾張名古屋藩士・樋口好古(1750-1826)が地方役在任中の領内巡検で得た知見を記した地誌。寛政4(1792)年起稿、文政5(1822)年に完成した。

左屋 勢州桑名迤川舟下り三里

佐屋宿(現愛知県海部郡佐屋町)は、佐屋街道の終点で、佐屋川を川舟で下って伊勢の桑名宿へ向かう「三里の渡」の起点であった。増水などで川止めとなり旅籠が不足した場合には、民家への宿泊も認められていた。「七里の渡」よりも安全性に勝るため、大名行列の多くも「三里の渡」を選び、この佐屋宿を利用している。上洛した歴代将軍(家康・秀忠・家光・家茂)も佐屋宿を利用しており、ケンペル(1651-1716)やシーボルト(1796-1866)の日記にも登場している。

木曾川ノ末 桑名川

本資料には、川下りの川舟、帆掛け船も描かれている。

勢州桑名郡 桑名城 松平越中守 十一万石 四日市エ三里八丁

桑名宿(現三重県桑名市)は東海道42番めの宿場で、佐屋街道の終点でもある。桑名藩の城下町でもあった。本資料での桑名城(平城)は、石垣の上に天守や複数の櫓まで描かれているが、現在は石垣と堀に往時の面影を遺すのみである。関ヶ原の戦い後の慶長6(1607)年、徳川四天王のひとり本多忠勝により築城が開始された。次代の本多忠政が播州姫路に転封されると、久松松平家の松平定勝(徳川家康の異父弟)が11万石の桑名藩主として入城し、宝永7(1710)年まで久松松平家の居城であった。久松松平家にかわって入城したのは、奥平松平家(徳川家康の外孫の家系)の松平忠雅であり、以降、七代にわたって桑名を治めた。文政6(1823)年には奥平松平家が武州忍藩に移封となり、久松松平家が再び桑名藩主となっている。桑名藩から越後高田藩を経て、陸奥白河藩に移り、再び桑名藩に戻ってきたことになる。このときの藩主・松平定永(1791-1838)は、松平定信の実子である。その子・定和以降、定猷、定敬と「越中守」を称した。松平定敬(1847-1908)は、美濃高須藩主の八男で、定猷の娘婿として桑名藩

主となった、いわゆる「高須四兄弟」の末弟で、兄は会津藩を継いだ松平容保である。「一会桑」の一角として、新政府からは目の敵にされ、戊辰戦争時には各地を転戦した(徳川慶喜や兄容保とともに、大阪から江戸へ、さらに越後柏崎から会津へ、仙台から函館へ)。明治10(1877)年の西南戦争にも参戦している。
*「高須四兄弟」=高須藩10代藩主松平義建の子息のうち、各家に養子に入り、それぞれ幕末史に名を残すことになった4人をさす。長兄が尾張藩主となった徳川慶勝(1824-1883)で、生母は水戸藩9代藩主・徳川齊昭の姉妹(真証院)であるから徳川慶喜とは従兄弟同士となる。次兄・茂徳(1831-1884)は父の跡を継いで高須藩11代藩主となったが、尾張藩主となっていた長兄が安政の大獄で隠居を命じられると、かわりに尾張藩主を、さらに15代將軍になった慶喜に代わって一橋家を相続している。三番目は、会津藩9代藩主となった松平容保(1836-1893)で、四番目が松平定敬である。

町屋川 橋アリ 長二百五十間

町屋川は、桑名城下(現三重県桑名市)の南を流れる員弁川の下流をさす。東海道がこの町屋川を渡るところには町屋橋が架けられていた。橋の中央で馬が待避できるほどの幅がある立派な橋だったようだ。現在の国道1号線に架かる「町屋橋」(昭和8年架橋)より西側にあった。

焼蛤名物

「その手は桑名の焼き蛤」という洒落があるように、焼蛤は古くから桑名の名物とされていた。実際は、桑名藩領内富田(現三重県四日市市富田)の、枯れ松葉や松笠を燃料として、殻付きの蛤を焼いた郷土料理で、「富田の焼き蛤」として伊勢参りのひとびとに愛されたようだ。よって、ここで描かれた町並みは、宿場ではなく、「立場」(継立場)の富田であり、そこは街道をゆくひとびとの休憩スポットであった。『東海道中膝栗毛』には、「富田の建場に至りける。爰は殊に焼蛤の名物、両側に茶屋軒を並べ往来を呼び立る声に引れて茶屋に立寄腰を掛ると…」とあり、弥次さん喜多さんも存分に味わっているが、悪ふざけが過ぎ、蛤の皿をひっくり返したはずみに、弥次さんの懐に焼き蛤が飛びこみ…といつもの大騒ぎとなっている。

四日市駅 神戸エ三リ八丁

四日市宿(現三重県四日市市)は、東海道の43番目の宿場である。戦国期にはすでに湊町として発展が見られ、江戸時代に東海道の宿場となってからは、水陸両方の交通の要衝として栄えている。

「右ハ上方 左ハサン宮 道」の石碑が鳥居の横にあり

「日永の追分」は現三重県四日市市追分にある、東海道と伊勢街道(参宮街道)の分岐点である。ここには伊勢神宮を遙拝するための大鳥居が建てられている。安永3(1774)年に奉獻されて以降、現在のものは9代めで、昭和48(1973)年の伊勢神宮式年遷宮の際に、伊雑宮の鳥居を移築したものである。本資料は、ここで東海道と別れ、伊勢街道(参宮街道)を進んでいく。

勢州河曲郡 神戸 本多伊豫守 一万五千石 白子へ一里半

伊勢国河曲郡[かわわぐん]神戸[かんべ]は、現三重県鈴鹿市に在し、戦国期には神戸一族が支配していた地域であり、天文年間(1532-1555)に神戸城が築城されている。織田信長の三男信孝が一時期養子入りし、神戸信孝を名乗っていたことでも知られる。以降、支配者は転々と変わり、享保17(1732)年に本多忠統が入封して以降は、幕末まで本多氏七代が支配した。初代藩主忠統、四代忠胤、五代忠升、六代忠寛、七代忠貫が、「伊予守」を称した。神戸城には、神戸(織田)信孝のとき、壮麗な天守が築かれたが、文禄4(1596)年には桑名城に移築されている。本多氏の入城に際し大改修されたが、天守は建て

られておらず、本資料に描かれているのは二重櫓であろう。これ以降、城下町として、また伊勢街道(参宮街道)の宿場として整備され発展していった。

勢州ノ内 亀嶋

現在は「神島」(現三重県鳥羽市)の名で知られる、伊勢湾入り口に浮かぶ有人島。歌島[かじま]、甕島とも云う。三島由紀夫(1925-1970)の『潮騒』の舞台として有名。

白子駅 上野エ壹り半

白子宿(現三重県鈴鹿市白子町)[しろこ]は、伊勢街道(参宮街道)の宿場。白子浜は古くから伊勢湾の物流拠点として栄えており、元和 5(1619)年から紀州藩が支配していた。この港に属す白子船は、紀州藩の御用米や木綿、醤油等を江戸に運ぶ廻船である。

大黒屋光太夫(1751-1828)は、神昌丸という白子船で天明 2(1782)年に白子港から江戸に向かう途上、遠州灘で遭難し、アリューシャン列島に漂着。ロシアで 10 年を過ごすことになる。その間、首府であるペテルブルグにも足を運び、エカテリーナ女帝とも謁見した。寛政 4(1792)年ラクスマンに連れられ、帰国を果たしている。

上野駅 津エ二り半

上野宿(現三重県津市河芸町)は、伊勢街道(参宮街道)の宿場。戦国期に織田信長の支配下に入った分部[わけべ]光嘉(1552-1601)によって築城された伊勢上野城(伊賀上野ではない)があり、城下町が形成されていた。関ヶ原の戦い後、光嘉は 2 万石の伊勢上野藩主となるが、元和 5(1619)年には廃藩となり、同地は紀州藩領となっている。城も廃城となったが、旧城下町は宿場として存続した。

勢州安濃郡 津城 藤堂和泉守 三十二万石三千九百五十石 松阪エ四り

津城は現三重県津市にある平城。安濃津城[あのおつじょう]ともいう。安濃津は、古くから博多津、坊津とともに「日本三津」のひとつとされ、伊勢国の中心としても栄えた湊町で、永禄年間(1558-1570)には長野氏によって城郭がつらわれている。その後、津城は織田信長の弟・信包により大小天守も備えた大規模なものに改修されている。慶長 13(1608)年に「築城の名手」とうたわれる藤堂高虎(1556-1630)が入城すると、城下町の拡充を含め、さらに大がかりな改修がほどこされた。その後は城下町としてのみならず、伊勢街道(参宮街道)の宿場としても繁栄を見ており、俗謡に「伊勢は津で持つ、津は伊勢で持つ」と謡われている。なお、天守は寛文 2(1662)年に火災で焼失後は再建されなかったと考えられており、本資料に描かれている大小の天守に見えるものは、櫓であると考えべきか、往時の姿を想像したものであろう。藤堂高虎以降、12 代にわたって、幕末までこの地を治めた藤堂家は(6代高治、12代高潔をのぞき)和泉守を官途としている。なお、巷間、新選組の藤堂平助は藤堂の殿様の御落胤ともいわれ、該当するのは 11 代高猷であるが真相は藪の中である。

クシダ川

櫛田川は、紀伊山地を東に下り、伊勢平野に入ってから現三重県松阪市内を南から北へ流れて伊勢湾に注ぐ一級河川である。伊勢神宮創建神話の主人公である倭姫命[やまとひめのみこと]が、天照大神を祀るべき地を求める旅の途上、櫛を落とした地が「櫛田」とあり、その故事にのっとり、歴代の齋宮が京都からの旅の途上で櫛田川に櫛を捨てた(禊ぎをした)といわれる。なお、本資料では、「津城」と「松阪」のあいだ

に「クシダ川」が描かれているが、伊勢街道(参宮街道)を南下した場合、櫛田川を渡るのは、松阪を過ぎてからである。

松阪 相可エニリ半

「松坂」は現三重県松阪市の城下町。織田信長の娘婿である蒲生氏郷(1556-1595)が城と城下町を築き、「松坂」と名付けたことにはじまる。蒲生氏の旧地・近江日野や伊勢大湊の商人を招き、街道も整備している。元和5(1619)年から紀州藩領となり、紀州藩城代が治める町となった。伊勢街道(参宮街道)、熊野街道(松坂道)、和歌山街道が集まる交通の要衝であり、特産品の松坂木綿を江戸をはじめとする都市で売りさばく伊勢商人発祥の地でもある。代表格は、もちろん、越後屋の三井家であろう。

＊和歌山街道は、紀州藩の本城がある和歌山と藩領である松阪を結ぶ道で、紀州街道、大和街道とも呼ばれ、一部は伊勢本街道と重複している。

「右熊野 左サン宮 道」の石碑

本資料では、ここからは伊勢街道(参宮街道)と別れ、右の熊野方面にすすんでいく。熊野方面への道は、その先で、さらに南下していく街道(熊野街道(松坂道))と、南西方向へ向かう和歌山街道(途中、伊勢本街道と重複)とに分岐する。

熊野街道は、平安時代後期に、都の上皇や法皇が相次ぎ参詣したことから盛んになった熊野三山への巡礼を支えた参詣道で、西まわりで熊野に向かう紀路(西熊野街道)と、東から入る伊勢路(東熊野街道)に大別できる。都の貴族たちの熊野詣では主に紀路が利用された。伊勢路は、御蔭参りや西国三十三所霊場巡りの流行にとまない隆盛をみた、比較的新しいコースである。

ツルノ渡し 舟ワタリ

「津留の渡し」は、伊勢本街道で櫛田川を渡るための渡し場(現三重県松阪市茅原町と多気郡多気町津留の境)。櫛田川沿いは深い溪谷になっており、伊勢本街道の難所のひとつだった。昭和4(1929)年に津留橋が架橋されるまで、この渡しは機能していたという。伊勢本街道は、大和国と伊勢神宮を結ぶ街道のうち最短のコースで、倭姫命が伊勢に向かった路といわれている。距離が短い分、難所も多い。

なお、松坂から南下し相可、前村、枋原へと向かうコース(熊野街道(松坂道))では、「津留の渡し」を通過することはない。

相可村 前村エーリ

相可村[おうかむら](現三重県多気郡多気町相可)は、南北に走る熊野街道(松坂道)と東西に走る伊勢本街道が交わる宿場となっており、物資の流通には村の北を流れる櫛田川の水運も利用された。

前村 枋原エーリ

前村は、現三重県多気郡多気町前村。ここで、熊野街道(松坂道)が、和歌山別街道と交わっている。

「右クマノ 左サング」の石碑

前村から南下してきた街道は、枋原村の先で熊野街道伊勢路に合流する。(本資料では「枋原」の手前に追分があるように描かれているが、実際の追分は「枋原」の先にある。)追分を左(＝東)へ向かうと伊勢(神宮)である。本資料では右(＝西)の熊野(大社)方面へすすんでいく。

栃原 合ノ村 粟生へーり半

栃原村(現三重県多気郡大台町栃原)は熊野街道沿いにある。「合ノ村」とあり、原則として旅人の宿泊が禁止されている「間宿」だったことがわかる。栃原村を過ぎ、熊野街道伊勢路に入ると、道は宮川沿いに上流に向かっていく。

粟生村 ミセエーリ

粟生村[あおむら](現三重県多気郡大台町粟生)は、宮川の左岸、熊野街道伊勢路沿いにある。

ミセ村 ノジリへーり

三瀬川村(現三重県度会郡大紀町三瀬川)。宮川の左岸、熊野街道伊勢路沿いの村で、式内社である多岐原神社がある。本資料では、「ミセ村」と「ミセ阪」のあいだに川(宮川)が描かれているが、実際は、両者は同岸(左岸)にある。

ミセ川 舟ワタシ

現三重県度会郡大紀町三瀬川に「三瀬の渡し跡」がある。栃原村の南から、熊野街道伊勢路は蛇行する宮川沿いにその左岸を上流に向かってすすんできたが、「三瀬の渡し」を舟で右岸に渡ると宮川を離れ、三瀬坂峠へと山中へ分け入っていくことになる。

なお、熊野古道の世界遺産登録(2004年)を受け、地元のひとつによって「三瀬の渡し」が復活(2010年)している。現在、「三瀬の渡し保存会」により運営され、「熊野古道ウォーク」等のイベント時に渡船体験ができるようになっている。

ミセ阪

三瀬坂峠(現三重県度会郡大紀町)は、標高 265mと高くはないが、急峻なつづら折りが続く難所であった。峠を越え下った先に「瀧原宮」がある。ここから、熊野街道伊勢路は宮川の支流である大内山川が北流していく、その右岸を南進していく。

野尻村 阿曾エーリ

野後村[のじり](現三重県度会郡大紀町滝原)は、「瀧原宮」が鎮座する地で、熊野街道伊勢路が南北につらぬいている。縄文時代の遺跡(長者野北遺跡・南遺跡)や古墳群もあり、早くから開発された地であったことがわかる。倭姫命伝承に基づく「滝原」の名で呼ばれた地だったが、村名としての使用を忌み、長者野の後(尻)にあたるとして「野尻」、元禄4(1697)年からは「野後」としたという。

瀧本太神宮

現三重県度会郡大紀町滝原にある「瀧原宮」[たきはらのみや]のこと。内宮(皇大神宮)の別宮とされる由緒ある古社。伊雑宮(三重県志摩市)とともに「大神の遙宮」[とおのみや]とされる。地元では「野後[のじり]さん」と呼ばれている。

七本松

長者野(現三重県度会郡大紀町滝原)に「七本松」という小字がある。かつて一里塚があったところとされ

るが、正確な場所はわからないという。一里塚につきものの松が7本植えられていたゆえの「七本松」であろうか。本資料にも松らしき木が(7本ではないが)描かれている。

野ヅリ阪

長者谷峠あるいは長者坂とも呼ばれた、野後村から阿曾村に入る峠道である。

阿曾村 間弓エ三リ

現三重県度会郡大紀町阿曾。熊野街道伊勢路沿いの村である。四方をすべて山に囲まれ、南北に走る熊野街道と大内山川沿いの狭い範囲にひとびとが暮らす山村である。紀州藩が新田開発を奨励し、順調に田地が増えていった。獣害がら村を護るためにつくられた「猪垣」は総延長7kmにおよび、その一部が原型を残したまま現在も5km以上残っている。

間弓村 長嵩エ二リ

現三重県度会郡大紀町大内山。熊野街道伊勢路は、大内山川の右岸を上流へと南進してきたが、間弓村の先で大内山川本流とはわかれ、さらに南へとのぼってゆく。その先が荷坂峠である。

「イセ キヒ サカヒ」の角柱 荷坂

荷坂峠は、熊野街道伊勢路の途上、現三重県度会郡大紀町と同県北牟婁郡紀北町のあいだにある標高241mの峠。三重県北牟婁郡は、かつては志摩国英虞郡に属していたが、天正10(1582)年からは紀伊国牟婁郡に属している。よって、荷坂峠が、伊勢国と紀伊国の国境となり、ここから熊野街道は奥熊野へと入っていく。古くは荷坂峠より西の「ツヅラ峠」(標高357m)が紀州の玄関口であったが、難所であり、紀州藩は、より勾配の穏やかな荷坂峠を藩の玄関口として整備に力を入れたため、いわゆる「熊野古道」のなかでは比較的歩きやすいコースとなっている。晴れた日には、遠くに熊野灘が見渡せる。鈴木牧之(1770-1842)は、『西遊記神都詣西国巡礼』で「ニサカ峠に見渡せば海上の絶景筆に尽くしがたく、世の人の只熊野路は恐しき噂のみ聞へけるにさはなくて長嶋の町まで一目に見おろす風情いはむかたなし」と記している。

二郷村 長シマノ十八丁

二郷村[にごむら]は、現三重県北牟婁郡紀北町紀伊長島区東長島。荷坂峠を下った先にあり、熊野灘に面している。海辺の村ではあるが、漁村ではなく、農間山稼ぎを主体とした村であった。

長シマ川 舟ワタシ

現在は赤羽川と呼ばれている、熊野灘にそそぐ川。十返舎一九(1765-1837)の「諸国道中金の草鞋九」に「さか(=荷坂)をくたりて川あり、この川、しほどきに、川上にてわたる、大水のときいわたしふね」とある。

長嶋浦 三浦エ二リ

長嶋浦(現三重県北牟婁郡紀北町紀伊長島区长島)は、赤羽川を越えた先にある漁村。(なお、現在は「伊勢長島」との混乱を避けて「紀伊長島」と呼ばれる。)江戸時代には、伊勢エビ、カツオ、サンマ漁を主体としていた。延享3(1746)年の「書上帳」には、船数99が書き上げられており、本資料でも、「長嶋浦」沖合に船影が描かれている。また、天然の良港である長嶋浦は、廻船の風待ち港としても利用されている。

「此所ヨリ木ノ本マテ行程凡十五里ノ中山嶮シク道セマシ甚難所ナリ

海上静ナレハ乗船スベシ」

「木ノ本」[きのもと]は、現三重県熊野市木本町。「木ノ本」から先の熊野街道は、浜街道と呼ばれる海岸沿いの平坦な道が目的地・新宮まで通じており、「長葦浦」から船で「木ノ本」へ向かうショートカットコースをとれば、熊野古道の難所である峠道のほとんどを回避することができる。

三浦阪

三浦峠(現三重県北牟婁郡紀北町)は標高 113mで、北側登り口からは急坂であるが、三浦の集落に繋がる南側は穏やかな坂道となる。

三浦 古里エーリ

現三重県北牟婁郡紀北町紀伊長島区三浦。豊浦、中野浦、玉津浦の三つの浦からなることから「三浦」と呼ばれるようになったとされるが、平地部分が比較的多い中野浦に人口が集中し、他の2つの浦は寂れている。江戸時代には地引き網を使ったイワシ漁が盛んであった。

古里 馬瀬エーリ

現三重県北牟婁郡紀北町紀伊長島区古里。このあたりの熊野街道は、南東側にむかって斜面となっており、熊野灘を望むこともできる眺望のよい場所も多い。なお、熊野街道を南下する場合、実際の通過順は古里→三浦峠→三浦であり、本資料の並びはおかしい。

馬瀬村 中里エ十八丁

馬瀬村[うまぜむら]は、現三重県北牟婁郡紀北町海山区馬瀬。荷坂峠を下ってからの熊野街道は、比較的海岸近くを通っていたが、「三浦」の南から内陸に入っていく。山間部を進むルートは、「馬瀬村」から船津川沿いに、「上里村」「中里村」と進み、船津川が引本湾に注ぐところにある「コノ本村」で、いったん海岸に出るが、ふたたび山間部の「ピンノ山」村に入る。そして「馬士セ阪」を越えて「尾ワシ」に至る。本資料の位置関係は実際とは微妙に違うことがあるが、ここでは「上里村」と「中里村」が逆である。

白浦 矢口エ十八丁

此所往来セズ 三浦ヨリ舟ニテ渡リ又矢口ヨリ尾ハシエ舟ニテワタル十リ
コレヲ掛ケ渡ト云レ

白浦[しろうら](現三重県北牟婁郡紀北町海山区白浦)は熊野灘に面した漁村。南に隣接する島勝浦[しまかつうら]とともに一時期、捕鯨も行なっていた。本資料の「馬瀬村」と「中里村」のあいだに、熊野灘に飛び出した島勝半島が描かれているが、「白浦」「矢口」ともこの半島内の小村である。「往来セズ」とあるように、陸路での往来は困難である。島勝半島最南端の須賀利浦[すがりうら](現三重県尾鷲市須賀利町)に至っては昭和 57(1982)年の県道開通まで自動車で行くことができず、大正 4(1915)年から平成 24(2012)年までは、尾鷲港との間を結ぶ「巡航船」が主な輸送手段だった。江戸時代も状況は似通っており、本資料でも半島の北東側付け根に位置する「三浦」から船で半島東側の「白浦」へ、そこから半島の反対側の「矢口(浦)」へは徒歩で移動し、そこからふたたび船で「尾鷲」へという「掛け渡」ルートが示されている。

矢口 コレヨリ尾ワシエ舟ニテワタル 往来ニアラズ

矢口浦[やぐちうら](現三重県北牟婁郡紀北町海山区矢口浦)は島勝半島にある小漁村。熊野灘(外海)側ではなく、尾鷲湾側の入り江(引本湾)の最奥部にある。

中里村 上里エ十八丁

現三重県北牟婁郡紀北町海山区中里。山間部の小農村。

上里村 コノ本エ十五丁

現三重県北牟婁郡紀北町海山区上里。山間部の農村

コノ本村 ビンノ山村へ十三丁

古本村[このもとむら]は、現三重県北牟婁郡紀北町海山区相賀。引本湾に注ぐ2本の川(銚子川、船津川)に挟まれた河口にある村。川運を利用して近隣から集まった木材・薪炭類を積み出す廻船の港になっていた。

ビンノ山村 尾ワシエーリ

便ノ山村[びんのやまむら]は、現北牟婁郡紀北町海山区便ノ山。村の外れに「真田屋敷」と呼ばれる場所があり、真田幸村の嫡子大介が大坂夏の陣の後、住んでいたという伝承がある。真田の落人伝承(真田堤、真田井戸)は、峠を越えた尾鷲にもみられるという。

馬士セ阪

馬越峠[まごせ]は、現三重県北牟婁郡紀北町と尾鷲市の境界にあたる峠で、標高は325m。熊野街道伊勢路のなかでもっとも美しい石畳が残るといわれる。なお、本資料では「馬士セ阪」と記述されているが、「士」は変体仮名「古」の書写ミスと考えられよう。

尾ワシ 三木里へ三リ

尾鷲(現三重県尾鷲市)は尾鷲湾の最奥部、リアス式海岸を持つ地域である。現在の市名は「おわせ」だが、地元での発音は「おわしえ」で、戦前までは「おわし」と書かれることも多かった。元和5(1619)年から紀州藩領となっている。熊野灘に面しているが背後にはすぐ山地がせまり、平地がほとんどないため農業には向いていない。地形的に降水量が多いことを利用した植林業を紀州藩が奨励したため特産品となった「尾鷲檜」が有名である。漁業はカツオ、シビ、サヨリ漁等を主とし、このカツオからつくられた鰹節は「熊野節」として江戸・大坂へ送られていた。

八木山 上り五十丁 下り廿八丁

八鬼山(現三重県尾鷲市)を越えて、尾鷲から三木里へ至る峠道。通称「八鬼山越え」(八鬼山の標高は627m)は熊野古道随一の難所で、登り下りともに厳しい急坂である。路傍には行き倒れた巡礼者を供養する石碑や石仏が無数に建っているという。

三木里 此所ヨリ曾根エーリ八丁 舟ニノルベシ 本街道ハ加多エ廻ル

三木里浦[みきさと](現三重県尾鷲市三木里町)は、八鬼山を越えて沓川沿いに南にくだったところにある、賀田湾に面した漁村。賀田湾は、非常に深く入り組んだ海岸線を持っており、4カ所の大きな入り江の最奥部にそれぞれ浦がある。「本街道ハ加多工廻ル」とあるように、八鬼山をくだった熊野街道は、東から二番めの入り江最奥部の三木里浦を通り、入り組んだ湾内の海岸線に沿った尾根道を、つぎの入り江最奥部の賀田(=「加多」)、そして曾根(現三重県尾鷲市曾根町)へと向かっていく。三木里浦と曾根村は陸路では二里の山道であるが、湾内をショートカットする船渡し(「一リ八丁 舟ニノルベシ」)で結ばれており、往時の旅人にも多く利用されていた。

曾根村 二木嶋エーリ八丁

曾根村(現三重県尾鷲市曾根町)賀田湾南側に位置する村。

曾根次郎 曾根太郎 山

「曾根次郎坂・太郎坂」と呼ばれる、浦母峠(標高 305m)を越える山道で、現在、三重県尾鷲市と熊野市の市境である。室町時代までは、この峠が志摩国と紀伊国の国境だったといわれている。曾根村側の坂が次郎坂、向こう側が太郎坂で、曾根村側(志摩国側)から見ての「自領」「他領」がなまったものとも説明されるが、どうであろうか。

二木嶋浦 アタシカエーリ

二木島[にぎしま]浦(現三重県熊野市二木島町)は、曾根次郎坂・太郎坂を越えた先、二木島湾の最奥部にある漁村である。古くから捕鯨の里としてしられ、「くじら供養碑」なども残されている。二木島浦を出た熊野街道は、また海岸を離れ、峠道へと入っていく。

ヲカミ阪

逢神坂峠[おうかみざか](現三重県熊野市新鹿町)は標高 290mの峠道で、狼が出没したとも、熊野と伊勢の神が出会う場所だったともいわれる。

新麻村 木ノ本エニリ

新鹿[あたしか]村(現三重県熊野市)は、新鹿湾に面した地域で、砂浜がつづき、現在は海水浴場になっている。本資料に「新(麻)村」とあるのは書写ミスであろう。

木ノ本 有馬村エ十八丁

木本村[きのもとむら](現三重県熊野市木本町)は、新鹿村から2つの峠を越えた先にある村。標高 135mの松本峠を越えると、木本村である。熊野街道沿道の景観はこのあたりから一変する。ここから新宮に向かう熊野街道は「浜街道」と呼ばれ、もはや峠越えはなく、海岸に沿った高低差のない真っ直ぐな道を南下していく。

イハジ川

井戸川は現三重県熊野市井戸町を流れる川。

大般若

現三重県熊野市有馬町にある花窟神社[はなのいわやじんじゃ]は、伊弉冉尊[いざなみのみこと]と迦具土命[かぐつちのみこと]を祀る神社。本資料にも描かれている巨岩「花の窟」がご神体で、熊野の磐座信仰を象徴するものとして、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の一要素を構成している。現在、もっとも知られた「花の窟」の由緒は、この巨岩中腹の洞穴に伊弉冉尊が埋葬されているというものであるが、紀州藩が編纂した『紀伊続風土記』(天保8(1839)年完成)には、この洞穴に三蔵法師が大般若経を納めた(よって「花の窟」を「般若の窟」ともいう)という伝承も載せられている。本資料にある「大般若」という記述はこちらの由緒に基づくものである。

有馬村 志原エーリ

現三重県熊野市有馬町。熊野街道伊勢路は、有馬村の南で、熊野速玉大社のある新宮をめざす「浜街道」と、本宮(熊野本宮大社)をめざす「本宮道」に分岐する。本資料では、海岸沿いの浜街道を南下してゆく。浜街道は峠越えのない平坦な道であるが、志原川や市木川の河口を徒歩で渡る際に命を落とす旅人も多かったという。

有馬ノ松原

熊野灘に面して現熊野市から南牟婁郡御浜町～紀宝町にかけて約25キロにわたってつづく砂礫海岸は「七里御浜」[しちりみはま]と呼ばれ、「日本の白砂青松百選」にも選ばれている。防潮・防風の目的で植えられた松原がつづく、美しい景観である。元和5(1619)年の徳川頼宣紀州入りに従った附家老の水野重央(1570-1621)が、旧領浜松から松苗を取り寄せて植栽したのがはじまりとされる。

志原村 市木村エ廿五丁

志原村[しわらむら]は現三重県南牟婁郡御浜町。熊野街道(浜街道)が志原川の河口を横切っており、増水時は舟で渡るが、通常は波打ち際を走り渡ったといい、遭難者も多かったと伝わっている。

市木村 阿田和村へーリ

市木村[いちぎむら](現三重県南牟婁郡御浜町)とあるが、慶長6(1601)には、「上市木村」「下市木村」にわかれている。下市木村に市木川が流れており、熊野街道(浜街道)がその河口を横切っている。市木川河口周辺は、江戸中期以降、新田開発がすすみ、上市木村は幕末期から養蚕がさかんになっている。

阿田和村 井田村エーリ

阿田和村[あたわ]は現三重県南牟婁郡御浜町。尾呂志川河口の左岸にある。

井田村 成川村へーリ

井田村[いだむら]は現三重県南牟婁郡紀宝町。熊野灘に面した小村。

成川村 新宮エ廿五丁

成川村[なるかわむら]は現三重県南牟婁郡紀宝町。熊野川(新宮川)を隔てて現和歌山県新宮市と相対する位置にある。熊野川を渡し船で越えると、いよいよ熊野速玉大社のある新宮となる。本資料には、豊かな水量をたたえる熊野川の河口と、対岸の新宮へ向かう渡し船が一艘描かれている。この熊野川の

上流には、本宮(熊野本宮大社)があり、本宮方面と新宮は陸路の熊野街道だけでなく、この熊野川でも結ばれていた。

紀州牟婁郡 新宮 丹鶴城(山の上に天守、櫓2棟、熊野速玉大社の鳥居)

丹鶴城[たんかくじょう]は現和歌山県新宮市にかつてあった平山城で、新宮城、沖見城[おきみじょう]ともいう。本資料には、山上の天主と2つの櫓が描かれている。(城の背後には、熊野速玉大社の鳥居も描かれている。)城が築かれた丘の名を丹鶴山といい、源為義(1096-1156:源頼朝の祖父)の娘とされる丹鶴姫が住まいした地と言われていた。浅野忠吉(1546-1621)が大小天守や二の丸を備えた近世的城郭を縄張りし、紀州藩附家老の水野重央(1570-1621)が3万 5000 石で新宮を領してのち、水野氏により改築されている。以降、幕末まで水野氏がこの地を治めたが、身分は紀州徳川家の家臣であり、大名ではない。本資料を描かせた9代水野忠央(1814-1865)は、「丹鶴叢書」の編纂でも知られているが、「丹鶴」は城(山)の名からとられている。